



US006885683B1

(12) **United States Patent**
Fermann et al.

(10) **Patent No.:** US 6,885,683 B1
(45) **Date of Patent:** Apr. 26, 2005

(54) **MODULAR, HIGH ENERGY, WIDELY-TUNABLE ULTRAFAST FIBER SOURCE**

(75) **Inventors:** Martin E. Fermann, Ann Arbor, MI (US); Almantas Galvanauskas, Ann Arbor, MI (US); Donald J. Harter, Ann Arbor, MI (US)

(73) **Assignee:** IMRA America, Inc., Ann Arbor, MI (US)

(*) **Notice:** Subject to any disclaimer, the term of this patent is extended or adjusted under 35 U.S.C. 154(b) by 0 days.

(21) **Appl. No.:** 09/576,772

(22) **Filed:** May 23, 2000

(51) **Int. Cl. 7** H01S 3/10; H01S 3/091; H01S 3/30

(52) **U.S. Cl.** 372/25; 372/3; 372/6; 372/70

(58) **Field of Search** 372/70, 18, 75, 372/6, 22, 25, 3

(56) **References Cited**

U.S. PATENT DOCUMENTS

4,750,809 A	6/1988	Kafka et al.	
5,185,827 A	2/1993	Poole	
5,499,134 A	3/1996	Galvanauskas et al.	
5,510,743 A *	4/1996	Shi	327/165
5,631,758 A *	5/1997	Knox et al.	359/127
5,818,630 A	10/1998	Fermann et al.	
5,847,863 A *	12/1998	Galvanauskas et al. ..	359/341.3
5,880,877 A *	3/1999	Fermann et al.	359/341.31
5,960,016 A *	9/1999	Perry et al.	372/25
5,998,759 A *	12/1999	Smart	219/121.69
6,014,249 A *	1/2000	Fermann et al.	359/341
6,072,811 A *	6/2000	Fermann et al.	372/11
6,154,310 A *	11/2000	Galvanauskas et al.	359/328
6,181,463 B1 *	1/2001	Galvanauskas et al.	359/330
6,275,250 B1 *	8/2001	Sanders et al.	347/247
6,281,471 B1 *	8/2001	Smart	219/121.62
6,449,301 B1 *	9/2002	Wu et al.	372/92

6,480,656 B1 * 11/2002 Islam et al. 385/123
6,496,301 B1 * 12/2002 Koplow et al. 359/337

OTHER PUBLICATIONS

M.E. Fermann, V.I. Kruglov, B.C. Thomsen, J.M. Dudley, and J.D. Harvey, *Self-Similar Propagation and Amplification of Parabolic Pulses in Optical Fibers*, (received Feb. 22, 2000), *Physical Review Letters*, Jun. 26, 2000, pp. 6010-6013, vol. 84, No. 26, © 2000 The American Physical Society.

M.E. Fermann et al, "All-fiber source of 100-nJ subpicosecond pulses", *Appl. Phys. Lett.*, vol. 64, 1994, pp. 1315-1317.

K. Tamura et al, Pulse Compression by Nonlinear Pulse Evolution with Reduced Optical Wave Breaking in Erbium-Doped Fiber Amplifiers, *Opt. Lett.*, vol. 21, No. 1, p. 68 (1996).

BJ Ainslie et al, "A Review of Single-Mode Fibers with Modified dispersion Characteristics", *J. Lightwave techn.*, vol. LT-4, No. 8, (1986) pp. 967-979.

(Continued)

Primary Examiner—Minsun Oh Harvey

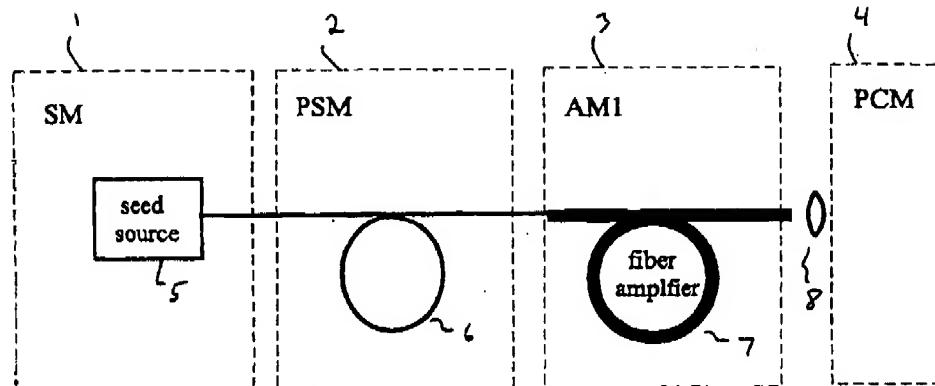
Assistant Examiner—James Menefee

(74) **Attorney, Agent, or Firm:** Sughrue Mion, PLLC

(57) **ABSTRACT**

A modular, compact and widely tunable laser system for the efficient generation of high peak and high average power ultrashort pulses. Modularity is ensured by the implementation of interchangeable amplifier components. System compactness is ensured by employing efficient fiber amplifiers, directly or indirectly pumped by diode lasers. Peak power handling capability of the fiber amplifiers is expanded by using optimized pulse shapes, as well as dispersively broadened pulses. After amplification, the dispersively stretched pulses can be re-compressed to nearly their bandwidth limit by the implementation of another set of dispersive delay lines. To ensure a wide tunability of the whole system, Raman-shifting of the compact sources of the ultrashort pulses in conjunction with frequency-conversion in nonlinear optical crystals can be implemented, or an Anti-Stokes fiber in conjunction with fiber amplifiers and Raman-shifters are used.

30 Claims, 17 Drawing Sheets



(19)日本国特許庁 (JP)

(12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開2002-118315

(P2002-118315A)

(43)公開日 平成14年4月19日 (2002.4.19)

(51)Int.Cl. ¹	識別記号	F I	テ-レ-ト-ル(参考)
H 01 S 8/10		H 01 S 8/10	Z 2 H 0 5 0
G 02 B 6/10		G 02 B 6/10	C 2 K 0 0 2
G 02 F 1/35	5 0 1	G 02 F 1/35	5 0 1 5 F 0 7 2
1/37		1/37	
H 01 S 9/06		H 01 S 9/06	B

審査請求 未請求 請求項の数74 O L 外国語出願 (全 78 頁) 最終頁に統く

(21)出願番号 特願2001-154396(P2001-154396)

(22)出願日 平成13年5月23日 (2001.5.23)

(31)優先権主張番号 09/576772

(32)優先日 平成12年5月23日 (2000.5.23)

(33)優先権主張国 米国 (U.S.)

(71)出願人 593185670

イムラ アメリカ インコーポレイテッド
アメリカ合衆国 ミシガン州48105 アン

アーバー ウッドリッジ・アベニュー1044

(72)発明者 マーテン・イー・ファーマン

アメリカ合衆国 ミシガン州 アンアーバ
ー レイバイン コート 4831番地

(72)発明者 アルマンテス・ガルバナスカス

アメリカ合衆国 ミシガン州 アンアーバ
ー レイバイン コート 4831番地

(74)代理人 100081776

弁理士 大川 宏

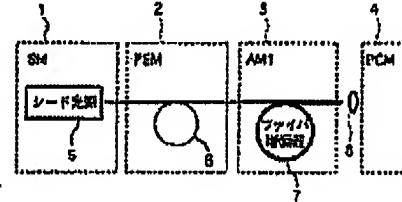
最終頁に統く

(54) [発明の名称] モジュール式、高エネルギー、広波長可変性、超高速、ファイバ光源

(57) [要約] (修正有)

【課題】高ピーク超短パルスを効率よく発生するモジュール式小型広波長可変レーザシステムを提供する。

【解決手段】システムの小型化はダイオードレーザで直接あるいは間接にポンプされた効率のよいファイバ増幅器を採用することで確実に行われる。ファイバ増幅器のピークパワー処理能力は分散的に広がったパルスはもちろん、最適化されたパルス形状を使うことで、高められる。分散広がりは自己位相変調と利得の存在下で分散パルスが拡張することで導入され、高パワー放物線状パルスの形成をもたらす。増幅後、分散的に広がったパルスは、別のセットの分散遅延ラインを実装することで、バンド幅限界近くまで再圧縮される。全体のシステムの広い波長可変性を確実にするために、非線形光学結晶での周波数変換と合同して超短パルスの小型光源のラマンシフトが実施される。さらに、正分散光増幅器、ラマン増幅器ファイバを利用する。



(2) 特開2002-118315

2

1

【特許請求の範囲】

【請求項1】 0.3 nm以上 のスペクトルバンド幅と、約50 fsと1 nsの間のパルス幅とをもつ波長範囲1～15 μmのパルスを発生するシード光源と、該パルスを入力して増幅し、増幅したパルスを出力する広いバンド幅のパルスのためのファイバ増幅器と、該ファイバ増幅器にレーザエネルギーを供給するためのポンブレーザと、を有するレーザシステム。

【請求項2】 前記シード光源は、ファイバレーザと、該ファイバレーザの出力を入力するラマンシフタと、該ラマンシフタの出力を周波数倍する非線形結晶と、を有する請求項1に関するレーザシステム。

【請求項3】 前記ラマンシフタは、前記ファイバレーザの放射波長を2000 nmより長いスペクトル範囲に上方変換するシリカベースのファイバであり、さらに前記非線形結晶は、その後、該上方変換された波長を1000～1500 nmのスペクトル範囲に下方変換する、請求項2に関するレーザシステム。

【請求項4】 非線形結晶の波長間調曲線は、ラマンシフタの出力の中心波長以下である請求項2に関するレーザシステム。

【請求項5】 前記ラマンシフタは、非増幅ファイバ、あるいは屈折率分布と約600～5000 nmの波長範囲のパルスを発生するために選定された希土類増幅イオンとをもつ増幅ファイバ、を有する請求項2に関するレーザシステム。

【請求項6】 前記シード光源は、E_rファイバレーザと、該E_rファイバレーザの出力を入力し、前記ファイバ増幅器に出力するシリカラマンシフトファイバと、前記増幅されたパルスを入力するフッ化ラマンシフタと、を有し、前記ファイバ増幅器は、Tmファイバ増幅器である、請求項1に関するレーザシステム。

【請求項7】 周波数倍速倍論を実行するようにフッ化ラマンシフトファイバの出力を入力する非線形結晶をさらに有する請求項6に関するレーザシステム。

【請求項8】 前記シード光源は、E_rファイバレーザと、周波数倍速倍論を実行するように該E_rファイバの出力を入力する非線形結晶と、該非線形結晶の周波数倍出力を入力するラマンシフタと、を有する請求項1に関するレーザシステム。

【請求項9】 前記シード光源は、受動的モードロックファイバレーザであり、前記ラマンシフトファイバは、非線形結晶の周波数倍出力を約750 nmから約1050 nmの波長範囲にラマンシフトさせるために使用されるホーリファイバである、請求項8に関するレーザシステム。

【請求項10】 前記シード光源は、受動的モードロックファイバレーザであり、一連の非増幅ファイバおよび異なる屈折率分布と異なる希土類増幅イオンをもつ増幅ファイバは、前記非線形結晶の周波数倍出力を約750

nmから約5000 nmの波長範囲にラマンシフトするために使用される、請求項8に関するレーザシステム。

【請求項11】 前記シード光源は、受動型モードロックファイバレーザを有する、請求項1に関するレーザシステム。

【請求項12】 前記受動型モードロックファイバレーザは、Ytファイバレーザである、請求項11に関するレーザシステム。

【請求項13】 前記受動型モードロックファイバレーザは、Ndファイバレーザである、請求項11に関するレーザシステム。

【請求項14】 前記受動型モードロックファイバレーザは、多モードである、請求項11に関するレーザシステム。

【請求項15】 前記受動型モードロックファイバレーザは、偏光保持である、請求項14に関するレーザシステム。

【請求項16】 前記受動型モードロックファイバレーザは、単一モードで偏光保持である、請求項11に関するレーザシステム。

【請求項17】 前記シード光源は、ファイバレーザと、該ファイバレーザの出力を入力し反ストークスブルーシフト出力を出力する周波数シフトファイバと、を有する、請求項1に関するレーザシステム。

【請求項18】 前記ファイバレーザは、E_r、E_r/Y₁、あるいはTmファイバレーザである、請求項17に関するレーザシステム。

【請求項19】 前記シード光源は、前記ファイバ増幅器で放物線状パルスの生成を誘起するパルスを発生する、請求項1に関するレーザシステム。

【請求項20】 前記シード光源と前記ファイバ増幅器との間にあって、該シード光源を該ファイバ増幅器に結合し、1 km以下の長さの光ファイバをもつ結合器をさらに有する請求項19に関するレーザシステム。

【請求項21】 前記ファイバ増幅器の出力に結合された光供給ファイバをさらに有する請求項1に関するレーザシステム。

【請求項22】 前記光供給ファイバは、ホーリファイバ、一本の数モードファイバおよび一本あるいは二本の単一モードファイバに接続された一本の数モードファイバからなる群から選択される請求項21に関するレーザシステム。

【請求項23】 前記シード光源は、前記ファイバ増幅器で放物線状パルスの生成を誘起するように100 psより短いパルスを発生し、さらに、前記ファイバ増幅器は、10より大きい利得をもつ、請求項22に関するレーザシステム。

【請求項24】 前記シード光源からパルスを受けて該パルスをちょうどよいときに分散的に並張し、該並張したパルスを前記増幅器に出力するパルス拡張器をさらに有

(3)

特開2002-118315

4

する請求項23に関するレーザシステム。
 【請求項25】前記増幅されたパルスを時間的に圧縮するパルス圧縮器を有し、該パルス圧縮器の分散は、該パルス圧縮器がねねよモードで出力するようなものである。請求項24に関するレーザシステム。
 【請求項26】前記シード光源は、TmあるいはHoファイバレーザと、該TmあるいはHoファイバレーザの出力を入力し周波数倍増理論を実行する非線形結晶と、を有する請求項1に関するレーザシステム。
 【請求項27】前記ファイバ増幅器は、YtあるいはNdのどちらかが添加される請求項1に関するレーザシステム。
 【請求項28】増幅されたパルスをおおよそバンド幅限界まで時間的に圧縮するためのパルス圧縮器を、さらに有する請求項1に関するレーザシステム。
 【請求項29】前記シード光源は、直接変調された半導体レーザである請求項1に関するレーザシステム。
 【請求項30】0.3nmより大きいスペクトルバンド幅と約50fsと1nsの間のパルス幅とをもつ1~1.15μmの波長範囲のパルスを発生するシード光源と、該パルスを受けて該パルスをちょうどよいときに分散的に拡張し、該拡張したパルスを出力するパルス拡張器と、広いバンド幅のパルスに対して10より大きな利得をもち、該拡張したパルスを受けて増幅しかつ出力するクラッドポンプファイバ増幅器と、該増幅され拡張されたパルスを入力し、それらをおおよそバンド幅限界まで時間的に圧縮するパルス圧縮器と、を有するレーザシステム。
 【請求項31】前記パルス拡張器は、1km以下の長さのファイバを有する請求項30に関するレーザシステム。
 【請求項32】前記パルス拡張器は、ホーリファイバを有する請求項30に関するレーザシステム。
 【請求項33】前記パルス拡張器は、一本の少數モードファイバを有する請求項30に関するレーザシステム。
 【請求項34】前記パルス拡張器は、一本あるいは多数の单一モードファイバと一緒に接合された一本の少數モードファイバを有する請求項30に関するレーザシステム。
 【請求項35】前記パルス拡張器は、1km以下の長さの单一モードファイバを有する請求項30に関するレーザシステム。
 【請求項36】前記パルス拡張器は、W状屈折率プロファイルをもつファイバを有する請求項30に関するレーザシステム。
 【請求項37】前記パルス拡張器は、多クラッド屈折率プロファイルをもつファイバを有する請求項30に関するレーザシステム。
 【請求項38】前記パルス拡張器は、負の3次分散をもつ一本のファイバと、負の2次分散をもつ線形チャーブ

ファイバ回折格子と、を有する請求項30に関するレーザシステム。

【請求項39】前記パルス並張器は、線形チャーブファイバ回折格子と、パルス圧縮手段で高次分散を補償するように、3次および高次分散の選択できる値をもつ一つあるいはより多くのファイバ透型回折格子と、を有する請求項30に関するレーザシステム。

【請求項40】前記パルス並張器と前記パルス圧縮器の間に接続された複数の付加的ファイバ増幅器と、1km以下の長さの光ファイバを有し、前記シード光源を該複数の付加的増幅器の最初の一つに結合するファイバ結合器と、該ファイバ増幅器の前、該複数の付加的ファイバ増幅器の後、あるいは該増幅器のどれかの中間、のいずれかに配置された複数のパルス採集手段と、をさらに有する請求項30に関するレーザシステム。

【請求項41】0.3nmより大きいスペクトルバンド幅と約50fsと1nsの間のパルス幅とをもつ1~1.15μmの波長範囲のパルスを発生するシード光源と、少なくとも一つの前方バスと一つの後方バスで動作する増幅器であって、該パルスを受けて増幅し、出力する。広いバンド幅のパルスためのクラッドポンプファイバ増幅器と、該ファイバ増幅器にレーザエネルギーを供給するためのポンプレーザと、該増幅器の一つの前方バスと一つの後方バスの間に配置された光変調器と、を有するレーザシステム。

【請求項42】複数の付加的ファイバ増幅器と、ここで少なくとも一つおよび複数の付加的ファイバ増幅器は、少なくとも一つの前方バスと一つの後方バスで動作する。少なくとも一つの前方バスと一つの後方バスで動作する前記の少なくとも一つのファイバ増幅器と複数の付加的ファイバ増幅器の最初のバスの後に配置された増幅器の基本モードを優先的に通過するモードフィルタと、をさらに有する請求項41に関するレーザシステム。

【請求項43】少なくとも一つの前方バスと一つの後方バスの間に配置された一つのパルス採集器を、さらに有する請求項42に関するレーザシステム。

【請求項44】2μmより大きな出力波長で動作するパルス光源であって、短パルス幅のパルスを出力するシード光源と、該パルスを入力し、該出力波長を生成する第一ファイバラマンシフタと、を有するパルス光源。

【請求項45】前記第一ファイバラマンシフタに接続された少なくとも一つの付加的ファイバラマンシフタと、該ファイバラマンシフタの間にかわるがわる接続された複数のファイバ増幅器と、をさらに有する請求項44に関するパルス光源。

【請求項46】前記ファイバラマンシフタの最後の一つに接続された透型結晶をさらに有する請求項45に関するパルス光源であって、該非線形結晶の波長回転曲線が、ラマンシフトされ増幅されたシードパルスのラマンスペクトル成分の中心波長以下に選定されるパルス光

50

(4)

特開2002-118315

5

観。

【請求項47】受動型モードロックファイバレーザと、該ファイバレーザの出力を増幅するためのY型増幅器と、を有する光パルス光源。

【請求項48】前記受動型モードロックファイバレーザは、Y型ファイバレーザを有する請求項47に関する光パルス光源。

【請求項49】10dB/km以下の利得と10dB以上の起始利得をもつ光ファイバ透過ラインに接続された純粹正分散ファイバ光増幅器と、該光ファイバ透過ラインに配置された分散補償素子と、該光ファイバ透過ラインに配置された光学フィルタと、を有する光通信サブシステム。

【請求項50】3dB/km以下の利得と20dB以上の総合利得をもつ光ファイバ透過ラインに接続された純粹正分散ファイバ光増幅器と、光ファイバ透過ラインの一端に配置された分散補償素子と、を有する光通信サブシステム。

【請求項51】光ファイバ透過ラインに接続された正分散光ファイバ素子と、光ファイバ透過ラインにやはり接続された光負分散素子と、を有する光通信サブシステムであって、該光ファイバ透過ラインを通過する光パルスで受けた自己位相変調の量は、光負分散素子よりも正分散光ファイバ素子の方が多い、光通信サブシステム。

【請求項52】前記負分散素子は、チャーブファイバ回折格子を有する請求項51に列挙された光通信サブシステム。

【請求項53】光ファイバ透過ラインに接続された純粹正分散をもつ複数のホーリファイバと、光ファイバ透過ラインにやはり接続された複数の光負分散素子と、を有する光通信サブシステムであって、光ファイバ透過ラインを通過する光パルスで受けた自己位相変調の量は、光負分散素子よりもホーリファイバの方が多い、光通信サブシステム。

【請求項54】10ns以下の長さをもつポンプパルス列を入力し、光信号も入力し、増幅し、出力する光ラマン増幅器ファイバを有する光通信サブシステムであって、該光信号は、該ラマン増幅器ファイバをポンプパルスに関して反対方向に伝搬する、光通信サブシステム。

【請求項55】前記光ラマン増幅器は、前記ポンプパルスに実施される同調操作で同調される、請求項54に関する光通信サブシステム。

【請求項56】光パルスを出力するシード光源と、該パルスを変調する変調器と、該変調された光パルスを入力するラマンシフタファイバと、該ラマンシフタファイバの出力を入力するラマン増幅器と、を有する請求項55に関する光通信サブシステム。

【請求項57】前記同調操作は、前記シードパルスが前記ラマンシフタファイバに注入されるまえに、該シード

パルスのパワー、波長およびY型の少なくとも一つを変調することを含む、請求項56に関する光通信サブシステム。

【請求項58】前記ラマンシフタファイバは、分散がある意味で前記ラマンシフタを最適化するように波長で変化するホーリファイバである、請求項9に関するレーザシステム。

【請求項59】シードパルスの光源と、該シードパルスを入力し増幅するファイバ増幅器と、を有するレーザシステムであって、該ファイバ増幅器で作られたパルスが放物線状であるように、該シードパルスは発生させられ、該ファイバ増幅器は、形作られる、レーザシステム。

【請求項60】シードパルスの光源と、該シードパルスを入力し増幅し、増幅されたパルスを出力するファイバ増幅器と、を有するレーザシステムであって、そのシード光源は、該ファイバ増幅器で放物線状パルスの形成を誇るパルスを発生する、レーザシステム。

【請求項61】シードパルスの光源と、該シードパルスを入力し増幅し、且つ増幅したパルスを出力するファイバ増幅器と、を有するレーザシステムであって、該ファイバ増幅器で作られたパルスが放物線状であるように、該シードパルスは発生させられ、該ファイバ増幅器は、形作られる、レーザシステム。

【請求項62】異なる波長の光パルスの光源と、該異なる波長の各々で経験したラマンシフトの度合いを目的に修正する手段と、を有する光通信サブシステム。

【請求項63】異なる波長の光信号を搬送するファイバ光搬送器と少なくとも一つのファイバレーザ増幅器とを有するタイプの光通信システムにおける、該異なる波長の信号に異なる利得を課す少なくとも一つのラマンシフタを有する改良。

【請求項64】パルス出力を発生するファイバレーザと、該ファイバレーザのパルス出力を入力するラマンシフタと、該ラマンシフタの出力を周波数倍する非線形結晶と、を有するレーザシステムのためのシード光源。

【請求項65】前記非線形結晶は、PPLN、PPリチウムタンタレート、PP-MgO:LiNbO₃、PP-KTPからなる群から選ばれた周期的にポールした強誘電光学材料と、KTP異種同形体の周期的にポールした結晶とを有する請求項64に請求されたシード光源。

【請求項66】請求項65に請求されたシード光源であって、前記非線形結晶の区間は、該シード光源のパルス出力のパルス長さを制御するために選定される、シード光源。

【請求項67】前記非線形結晶の出力波長は、該非線形結晶の温度を制御することで制御される、請求項65に請求されたシード光源。

【請求項68】供給ファイバと、回折格子型パルス圧縮器と、該パルス圧縮器の3次分散を補償するためのW-

(5)

特開2002-118315

7

ファイバと、を有する放物線状パルス体制で動作するファイバレーザシステム用供給システム。

【請求項6 9】放物線状パルス体制で動作するファイバレーザ増幅システム用分散補償配列であって、該システムの増幅器段の前に配置され、少なくとも一つの負の3次分散生成素子を含むパルス拡張器と、該拡張器で導入された分散を取り消す正の3次分散をもち、2次分散を補償するために該増幅器段の後に配置されたパルス圧縮器とを有する分散補償配列。

【請求項7 0】放物線状パルス体制で動作するファイバレーザ増幅システム用分散補償配列であって、該システムの増幅器段の前に配置され、少なくとも一つの正の2次分散生成素子と3次と4次分散を生成するための少なくとも一つのブラックファイバ回折格子およびファイバ透過回折格子を含むパルス拡張器と、該拡張器で導入された分散を取り消す正の3次分散をもち、2次分散を補償するために該増幅器段の後に配置されたパルス圧縮器とを有する分散補償配列。

【請求項7 1】フェムト秒体制シードパルスの光源と、ポンプパルスを形成するために該シードパルスを受けて波長シフトするラマンシフトファイバと、該ポンプパルスと反対方向に伝搬する複数の信号波長パルスを注入されたラマン増幅器ファイバと、該ポンプパルスを波長同調するためと、該ラマン増幅器のラマン利得の中心波長を同調するために、該シードパルスのパワー、波長、幅の少なくとも一つを変調する手段と、を有する波長可変ラマン増幅器。

【請求項7 2】請求項7 1に請求された増幅器であって、前記ポンプパルスは、前記信号パルスを有効な修正ラマン利得スペクトルに合わせるように、該ラマン増幅器の信号パルス構造時間以下の時間周期で波長同調される、増幅器。

【請求項7 3】1ナノ秒以下のパルス幅をもつパルス出力を発生するファイバレーザと、分散が、幾つか波長同調を最適化するように波長で変化するホーリファイバと、を有する波長可変レーザシステム。

【請求項7 4】パルス出力を発生するファイバレーザと、分散が、幾つか波長同調を最適化するように波長で変化するホーリファイバと、を有する波長可変レーザシステムであって、波長同調範囲内で、該ホーリファイバは、負の2次分散を示し、波長300 nm以内で入力パルス光源に対し2次分散ゼロをもち、シリカの3次材料分散の絶対値に等しい絶対値あるいはそれ以下の3次分散を示す、波長可変レーザシステム。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の背景】1. 発明の分野

この発明は、波長選択ができ、コンパクトで、モジュール式で、かつ効率的な高パワー超短レーザパルス光源に關し、この超短レーザパルス光源は、超高速レーザ技術

8

の工業使用における基本的な構成要素である。

【0002】2. 関連技術の記述

ファイバレーザは、これまで長い間、超短パルス発生用の有効な端末を与えると認識されてきた。しかしながら、これまで、そのようなシステムは、主に、波長可変性に対して制限されたオプションをもち、かつ最小の達成可能パルス幅に限界がある、動的に波長がシフトした（チャーブした）ブラック回折格子を使用した瞬時周波数が変化するパルス（チャーブしたパルス）増幅に基づいていた（A. Galvanauskas and M.E. Fermann, 'Optical Pulse Amplification using Chirped Bragg Gratings', United States Patent, No. 5,499,134）。チャーブしたブラック回折格子は、実に広く入手できるデバイスに発達してきた。そして、ブラック回折格子内のチャーブは、線形、あるいはチャーブパルス増幅システム内の任意のオーダの分散を補償するために、非線形に、さえもデザインされる（A. Galvanauskas et al., 'Hybrid Short-Pulse Amplifiers with Phase-Mismatch Compensated Pulse Stretchers and Compressors', U.S. Patent No. 5,847,853）。このチャーブパルス増幅システムは、バンド幅制限パルス、すなわち、与えられたスペクトルのパルスバンド幅にとって最も短くできるパルス、の発生に重要である。

【0003】光ファイバのパワーとエネルギーの限界を最大化するために、チャーブパルス増幅を使用することは、明らかに望ましいが、同時に、システム集積化の要求（ブラック回折格子は、最も高い可能な分散を与るために、透過よりむしろ反射で動作する必要がある）は、そのような標榜的なチャーブパルス増幅システムの使用を演出する。チャーブパルス増幅の代わりとして、多モードファイバ増幅器での高パワーパルス増幅が提案された（M. E. Fermann and D. Harter, 'Single-mode Amplifiers and Compressors Based on Multi-mode Optical Fibers', United States Patent, No. 5,818,630）。またチャーブパルス増幅の代わりとして、ファイバ増幅器でのソリトンラマン圧縮を使用することや、あるいは、一般的に、非線形ファイバ増幅器中のパルス圧縮を使用することが提案された（M. E. Fermann, A. Galvanauskas and D. Harter, 'Apparatus and Method for the Generation of High-power Femtosecond Pulses from a Fiber Amplifier', United States Patent, No. 5,880,877）。

【0004】明らかに、多モードファイバの使用は、そのようなシステムの性能をさらに改善するために、チャーブパルス増幅およびソリトンラマン圧縮と結合される。しかしながら、今まで、全体のシステム性能をさらに最適化するためのパルス形状制御法は、全然記述されなかった。同じく、そのようなチャーブパルス増幅システムの拡張器部分に自己-位相変調を使用することは、提案されていなかった。

【0005】さらに、システムのコンパクト化と高エネ

(6)

特開2002-118315

9

ルギ化の折衷案として、バルク光学圧縮器と合同してファイバ分散遅延ラインを使用することは、有利であり、少なくとも、高-エネルギーファイバレーザシステムの部分的な集約化をもたらす (M.E. Feinmann, A. Galvanauskas and D. Harter, 'All fiber source of 100 nJ sub-picosecond pulse', *Appl. Phys. Lett.*, vol. 64, 1994, pp. 1315-1317)。しかしながら、今日まで、バンド幅限界近くまでパルスを再圧縮するために、拡張器と圧縮器の組合せの中で、より高次の3次および4次分散を制御する有効な方法は、全然開発されなかった。

【0006】チャーブパルス増幅の代わりとして、高-利得正分散(非ソリトンを持続させる)シリカベースの単一モードエルビウム増幅器をバルクプリズム圧縮器と組み合わせて使用することにより、有効なパルス圧縮が得られるということも以前に提案された (K.Tamura and M.Nakazawa, 'Pulse Compression by Nonlinear Pulse Evolution with Reduced Optical Wave Breaking in Erbium-Doped Fiber Amplifiers', *Opt. Lett.*, Vol. 21, p. 68 (1996))。しかしながら、この技術をシリカベースのエルビウム増幅器と合同して使用することは、問題である。なぜなら、正分散のための要求がファイバコアサイズを約5ミクロンに制限するか、さもなければ、負の材料分散が、正の導波路分散を支配し、全体を負のファイバ分散にするからである。同様に、シリカベースの多モードファイバは、エルビウム増幅器波長で負の分散をもち、有効なパルス圧縮のためにそれらを使用することを妨げている。このように、正分散エルビウム増幅器の限界されたコアサイズは、達成可能なパルスエネルギーを大きく減少させる。

【0007】さらに、一つのエルビウム増幅器の後で付加的なスペクトル拡大やパルス増幅を行う方法は、田村らによって示されなかった。同様に、エルビウム増幅器の分散を補償するためにプリズムパルス圧縮器の性能を最適化させる方法は、田村らによって教示されなかった。

【0008】チャーブパルス増幅の別の代わりとして、非増幅光ファイバをバルク回折格子圧縮器と合同して使用することが提案された (D.Grischkowsky et al. and J.Kafka et al., U.S. Patent No. 4,750,809)。しかしながら、そのようなシステムには利得がないので、高パルスエネルギーが、高出力パワーを得るために非線形光学素子に結合されなければならず、システムのピークパワー特性を低下させる。さらに、そのような光学配置で、より高次の分散を補償する方法は試験されておらず、このアプローチの実現性を大きく制限している。さらに、そのようなシステムへの入力でのパルス形状を制御することなしで、線形チャーブをもつスペクトル広がりは、非常に限界された入力パワーでのみ得られる。入力パルス形状の制御は、Kafkaらによって試験されなかった。同様に、バルク回折格子圧縮器と合同して最も短い可能な

10

パルスを得るために、そのような非線形光学素子における2次および3次分散制御が、必要とされるが、これも Kafkaらによって試験されなかった。

【0009】別の(分散-補償)導波路素子中に色分散を使用しての(低パワー)光波信号中の色分散補償は、電子通信システムの性能を最適化するために導入された (C.D.Poole, 'Apparatus of compensating chromatic dispersion in optical fibers', US Patent No. 5,185,824)。しかしながら、高-パワー-パルス光源の場合、分散-補償導波路素子によって導入される自己-位相変調は、それらの有効な使用を妨げる。さらに、Pooleによって試験されたシステムは、分散-補償導波路素子中に高次モードを選択的に吸収するため、あるいは、分散-補償導波路素子中で基本モードを選択的に増幅するため、モード-変換器および、あるいは希土類添加ファイバと合同して動作するだけである。自己-位相変調の存在下での高-パワー光パルスの分散を補償する方法は、何ら教示されなかった。また、モード-変換器なしの分散-補償導波路を実施する方法は、何ら提案されなかった。

【0010】モード-変換器と高次モードを使用する代わりとして、W-スタイルの屈折率プロファイルをもつファイバが知られている (B.J.Ainslie and C.R.Day, 'A review of single-mode fibers with modified dispersion characteristics', *J. Lightwave Techn.*, vol. LT-4, No. 8, pp. 967-979, 1986)。しかしながら、高-パワー-ファイバチャーブパルス増幅システムへの、そのようなファイバデザインの使用は、試験されたことがなかった。

【0011】超高速ファイバ増幅器の効率を最大にするために、Yt₃Al₅O₁₂ファイバ増幅器の使用が提案された (D.T. Walton, J.Nees and G.Mburou, 'Broad-bandwidth pulse amplification to the 10 nJ level in an ytterbium-doped germanosilicate fiber', *Opt. Lett.*, vol. 21, no. 14, pp. 1061 (1996))。しかしながら、Waltonらによる研究は、信号パルスの光源としてモードロックTi:サファイアレーザを採用するばかりでなく、Yt₃Al₅O₁₂ファイバの励起にアルゴンレーザポンプTi:サファイアレーザを採用したが、これは、非常に効率がわるく、且つ明るかに小型装置と両立しない。さらに、増幅過渡で光パルスの位相を制御する方法は、何ら提案されなかった、すなわち、Ti:サファイアレーザからの100 fsパルスが、1.6 kmの長さの単一モードファイバ分散遅延ラインを通してYt₃Al₅O₁₂ファイバ増幅器に結合されたが、この遅延ラインは、システムを超高速増幅に適用することを大きく制限する高次分散による大きな位相歪みを起こす。それよりは、Yt₃Al₅O₁₂ファイバ増幅器中に高品質高パワー放物線状パルスを誘起するためには、200-400 fsの範囲のシードパルスが2、3 mの長さのYt₃Al₅O₁₂ファイバ増幅器には好ましい。Waltonらによる単一モードYt₃Al₅O₁₂ファイバ増幅器

(7)

特開2002-118315

11

の使用は、Yb増幅器のエネルギーとパワーの限界をさらに大きく制限する。多モードYb添加ファイバの使用は、内容がここに参考文献として組み入れられた米国出願No. 09/317, 221に提案されたが、Yb増幅器と両立する小型超短パルス光源は、わかりにくいま残った。

【0012】能動的な光変調器に組み入れられる広可変パルスYb-ファイバレーザが、最近記述された(1) Porta et al., 'Environmentally stable picosecond ytterbium fiber laser with a broad tuning range', Opt.Lett., vol.23, pp.615-617(1998)。このファイバレーザは、およそYbの利得バンド幅内の同調範囲を説いているが、そのレーザを超高速光学に適用することは、そのレーザで発生される比較的長いパルスにより制限される。一般的に能動モードロックレーザは、受動モードロックレーザより長いパルスを発生し、この現状のケースでは、発生したパルスのバンド幅は、5 psの最小パルス幅をもじめか0.25 nmである。

【0013】非線形結晶中の周波数変換と合同してラマンシフトを使った広波長可変ファイバレーザ光源が、最近記述された。(M.E.Fermann et al., US Patent No.5,890,872 and N.Nishizawa and T.Goto, 'Simultaneous Generation of Wavelength Tunable Two-Colored Femtosecond Soliton Pulses Using Optical Fibers,' Photonic Techn.Lett., vol.11, no.4, pp.421-423参照)。基本的に、空間的に不变なラマンシフトが提案され、その結果、波長可変範囲は300-400 nmに制限される(Nishizawa et al.参照)。さらに、ラマンシフトの推進する応用や、非線形光学結晶での非線形周波数変換に基づく高度な非線形システムのノイズを最小にする方法は、何も知られていない。さらに、西澤らによって記述されたシステムは、ラマンシフトをシードするための付加的偏光制御エルビウムファイバ増幅器で増幅された比較的複雑な低パワー偏光制御エルビウムファイバ発振器につながった。さらに、EDFAを用いた回波反射出力のラマンシフトを可能にする方法は、何も記述されていない。

【0014】高パワーファイバ発振器からのパルスで、あるいは、高パワーファイバ発振器からの周波数変換されたパルスで、直接シードされたラマンシフトが明らかに好ましい。そのようなファイバ発振器は、最近多モード光ファイバを使って記述された(M.E.Fermann, 'Technique for mode-locking of multi-mode fibers and the construction of compact high-power fiber laser pulse sources', U.S. serial number 09/199,728)。しかしながら、ラマンシフトをその後使用したような発振器の周波数を変換する方法は、今まで論議されたことがない。

【0015】

【発明の概旨】したがって、本発明の目的は、モジュ

12

ル化しやすく、小型、広波長可変、高ピーク、高平均パワー、低ノイズ超高速ファイバ増幅レーザシステムを提供することである。

【0016】1) 短パルスシード光源、2) 広バンド幅ファイバ増幅器、3) 分散短パルス並張素子、4) 分散パルス圧縮素子、5) 非線形周波数変換素子、6) ファイバ分配用光学部品、のような様々な容易に交換できる光学系を使用することで、システムのモジュール化を確実にすることが、発明の別の目的である。さらに、提案された任意のモジュールは、交換できる光学系の下位セットに構成され得る。

【0017】高度に集積化された分散遅延ラインも、ダイオードレーザで直接あるいは間接にポンプされた有効なファイバ増幅器も、使用することで、システムの小型化を確実にすることが、発明の別の目的である。ファイバ増幅器の高ピークパワー特性は、放物線状あるいは他の最適化されたパルス形状を使うことで、大きく拡大される。自己位相変調と合同して、放物線状パルスは、大バンド幅、高ピークパワーパルスの発生も、良く制御された分散パルス並張も、可能にする。高パワー放物線状パルスは、ファイバの材料分散が正である波長で動作する商利得の單一あるいは多モードファイバ増幅器で発生される。

【0018】放物線状パルスは、自己位相変調あるいは一般的なカーボン型光学非線形性の存在下でも相当なファイバ長に沿って分配されるあるいは伝搬され、十分に線形なパルスチャーブを招く。そのようなファイバ分配あるいはファイバ伝搬ラインの端部で、パルスは、およそバンド幅限界まで圧縮される。

【0019】さらに、ファイバ増幅器の高エネルギー特性は、放物線状パルスあるいは他の最適なパルス形状と合同してチャーブパルス増幅を使用することで大きく拡大され、そのパルス形状は、パルス品質の劣化なしに沢山の自己位相変調を可能にする。より高度に集積化されたチャーブパルス増幅システムは、バルク光学パルス圧縮器(あるいは低非線形性ブラック回折格子)あるいはパルス圧縮を周波数変換と結びつける周期的に色散分子の配向を揃えた(ポールした)非線形結晶を使用することで、光ファイバの高エネルギー特性を損なうことなく作られる。

【0020】ファイバパルス拡張器とバルク光学圧縮器での分散は、調整可能な2次、3次、4次分散をもつファイバパルス並張器を組み込むことで、4分の1のオーダーの位相に適合される。調整可能な高次分散は、それ自身あるいは、線形チャーブファイバ回折格子と合同して標準的な階段状回折率分布(ステップ-インデックス)高開口数ファイバを適用することで最適化された回折率分布をもつ高開口数単一モードファイバを使って、得られる。あるいは、高次分散は、高開口数の数モードファイバでの高次モードの分散特性を使用するか、透過

(8)

特開2002-118315

13

型ファイバ回折格子と台同して非線形チャーブファイバ回折格子あるいは線形チャーブファイバ回折格子を使用することで、制御される。調整可能な4次分散は、ファイバブラック回折格子、透過型ファイバ回折格子のチャーブを制御し、且つ異なる割合の2次、3次、4次分散をもつファイバを使用することで、得られる。同様に、高次分散は、周期的にポールした非線形結晶を使用することで得られる。

【0021】ファイバ増幅器は、好ましくは短バルスファイバ光線の形をした短バルスレーザ光源でシードされる。又りファイバ増幅器の場合、ラマンシフトした周波数倍増バルスEトファイバレーザ光源が、広波長可変シード光源として、実装される。1.5μmから1.0μmへの周波数変換のノイズを最小にするために、Eトファイバレーザバルス光源の自己-制限ラマンシフトが使われる。あるいは、非線形周波数変換プロセスのノイズは、自己-制限周波数倍増を実施することで最小化される。倍増結晶の同調曲線の中心波長は、ラマンシフトバルスの中心波長より短い。

【0022】ラマンシフトと周波数倍増のプロセスは逆にすることも可能である。そこでは、Eトファイバレーザは、最初に周波数倍増され、その後800nm前後の波長と、1μmの波長制限用のシード光源をつくるためのより高い波長と、に対してソリトーン-維持分散を与える最適化されたファイバで、ラマンシフトされる。

【0023】Yb増幅器用の低-復縁シード光源の代わりとして、モードロックYbファイバレーザが使用される。ファイバレーザは、強くチャーブしたバルスを作るようデザインされ、光学フィルタが、又り増幅器用バンド幅限界近いシードバルスを選定するために結合される。

【0024】放物線状バルスは、十分なファイバ長に沿って伝送されるので、そのバルスは、ファイバ光学通信システムにも使用される。このシステムでは、外部バルス光源で発生された放物線状バルスが伝送される。あるいは、放物線状バルスは、伝送プロセスでも発生される。後者のケースでは、伝送システムでの光学非線形性の有効な作用が、長い、分布型、正分散光増幅器を実装することで一般的に最小化される。そのような増幅器は、少なくとも10kmの長さと10dB/km以下の利得をもつ。増幅器当たりの全利得は、光学非線形性の有効な作用の最小化のための放物線状バルス形成の開始を活用するために、10dBを超えるべきである。伝送ラインのチャーブ構造は、ファイバ伝送線に沿ってと伝送線の端部にもチャーブファイバブラック回折格子を使用することで、通常実施される。光学バンド幅フィルターが、伝送したバルスのバンド幅制御のために、さらに実装される。

【0025】光ファイバでの短バルスのラマンシフトに基づく波長可変バルス光源は、多くの応用、たとえば、

14

分光分析で有益である。しかしながら、低気圧通信システム用の波長可変ファイバラマン増幅器の製作にラマンシフトを応用することで、非常に魅力的な装置が作られる。この波長可変システムにおいて、ラマンシフトしたポンプバルスは、可変波長範囲のためにラマン利得を与える。ポンプバルスに関して亦にシフトされる。さらに、ラマン利得スペクトルの形状は、ラマンシフトしたポンプバルスを変調することで、制御される。

【0026】

10 【提出された実施例の詳細説明】発明の一般化されたシステム図が、図1に示される。レーザシード光源1（シードモジュール；SM）で発生されたバルスは、バルス拡張モジュール2（PSM）に結合され、そこでバルスは、分散的に時間が拡張される。拡張されたバルスは、クラッドポンプされたYbファイバ増幅器3（増幅器モジュール、AM1）の基本モードに結合され、そこでバルスは、少なくとも10倍増幅される。最後に、バルスは、バルス圧縮器モジュール4（PCM）に結合され、そこではばバンド幅限界近くまで時間的に圧縮される。

20 【0027】図1に示した実施例は、モジュール型で、4つのサブシステム；SM1, PSM2, AM1, PCM4、からなる。サブシステムは、別の実施例に記載されたように、異なる形状にはもちろん、個別でも使用される。

【0028】以下、説明はSM-PSM-AM1-PCMシステムに適応する。SM1は、好ましくはフェムト秒バルス光源（シード光源5）を有する。PSMは、好ましくは一本のファイバ6を有し、SMとPSMの間の結合は、好ましくは融着で行われる。PSMの出力は、好ましくはAM1モジュール3の内部の又り増幅器7の基本モードに注入される。結合は、融着、ファイバ結合器、あるいはPSM2とファイバ増幅器7の間のバルク光学結合システム、で行われる。すべてのファイバは、好ましくは偏光保持型が選択される。PCM4は、好ましくは小型化の理由で、一つあるいは二つのバルク光学回折格子で形成される分散遅延ラインを有する。あるいは、多数のバルク光学プリズムやブラック回折格子がPCM4に使われる。PCM4への結合は、図1に単レンズ8で描寫されているように、バルク光学レンズシステムで行われる。ファイバブラック回折格子を含むPCMの場合、ファイバビッグテールがPCMへの結合に使われる。

【0029】フェムト秒レーザシード光源の一例として、ラマンシフト周波数倍増Eトファイバレーザが、図2のSM1内に示されている。フェムト秒レーザ9は、波長1.57μmで200fsバルス、繰り返し周期50Hzで1nJのバルスエネルギーを供給する市販の高エネルギーソリトン光源（IMRA America, Inc., Fentoite B-60TM）である。

50 【0030】1.5μmから2.1μmの波長領域への

(9)

特開2002-118315

15

最適なラマンシフトのために、偏光保持ラマンシフトファイバ10の長手方向にコア絞(テーパ化した)を減らすことが行われる。コア絞の減少は、1.5から2.1μmまでの全波長範囲でラマンシフトでの2次分散を抑(しかし角)近くまで保つために必要とされる。2次分散の絶対値を小さく保つことで、ラマンシフト内でのパルス幅が最小化され、このことは、ラマン周波数シフトの最大化をもたらす(J.P.Gordon, "Theory of the Soliton Self-frequency Shift," Opt. Lett., 11, 562(1986))。テーパ化なしでは、ラマン周波数シフトは、一般に2.00μm前後に制限され、この2.00μmは、周波数倍倍後でもYbファイバ増幅器の利得バンド幅と一致しない。

【0031】この特別の例では、それぞれ6μmと4μmのコア絞をもつ3.0mと3mの長さのシリカ'ラマン'ファイバ(1.56μmで単一モード)からなる2段階ラマンシフト10が実装される。シリカの赤外吸収端の始まりが2.0μmであることにより、ラマンシフト10の終端方向にテーパ化する率を増加することが有利である。現在の例では、1.57μmから2.10μmへの変換効率2.5%以上が得られている。なめらかに変化するコア絞をもつ、より多数のファイバを使うか、あるいはなめらかに変化するコア絞をもつ单一のテーパ化ファイバを実装することで、よりよい変換効率が得られる。

【0032】ラマンシフトしたパルスの1.05μm領域への周波数変換は、適当に選定されたポーリング周期をもつ一本の周期的にポールしたLiNbO₃(PPLN)結晶11で行われる。(この仕様全てであるが、周波数変換用の好みの材料は、PPLNのように必要であり、他の周期的にポールしたPPリチウムタンタレート、PP-MgO:LiNbO₃、PP-KTPのような強電性光学材料あるいはKTP異種同形体の周期的にポールした結晶も有利に使用されることが理解されるべきである。) PPLN結晶11との結合は、図2にレンズ12と示されたレンズシステムを使って行われる。PPLN結晶11の出力は、レンズ12で出力ファイバ13に結合される。1μmの波長領域で40pJ以上のパルスエネルギーをもたらす2.1μmの周波数倍倍の場合、18%の変換効率が得られる。周波数変換されたパルスのスペクトル幅は、PPLN結晶11の長さの適当な選択で選定される、たとえば、13mmの長さのPPLN結晶は、約800fsのパルス幅に対応する1.05μm領域での2nmのバンド幅を生成する。発生されたパルス幅は、およそPPLN結晶の長さに比例する。すなわち、400fsのパルス幅をもつ周波数変換されたパルスは、長さ8.5mmのPPLNを必要とする。このパルス幅縮小は、周波数変換されたパルス幅が、約100fsに達するまで続けられ、ラマンシフトしたパルスの制限された100fsのパルス幅は、さら

16

なるパルス幅の減少を制限する。

【0033】さらに、周波数変換されたパルス幅がラマンシフトしたパルスのパルス幅より十分長いとき、ラマンパルスの広いバンド幅は、周波数変換されたパルスの波長同調を可能にするために活用される。すなわち、有効な周波数変換は、周波数で2($\omega_1 - \delta\omega$)から2($\omega_1 + \delta\omega$)までのパルス範囲にとって得られる。ここで、 $2\delta\omega$ は、ラマンシフトしたパルスのスペクトルの最大値の半分でのスペクトル幅である。ここでの連続波長同調は、周波数変換結晶11の温度を調節することで簡単に実行される。

【0034】ラマンシフト、PPLN結晶の組み合わせの増幅されたノイズは、次のように最小化される。Erファイバレーザーパルス光源の自己制限ラマンシフトは、ラマンシフトをシリカベースの光ファイバでの2μmより大きい方に拡張することで使用される。2μm以上の波長の場合、シリカの赤外吸収端がパルスを大きく減衰し始め、ラマンシフトの制限や増幅変動の減少をもたらす。すなわち、1.5μmでの増加したパルスエネルギーは、より大きなラマンシフトや2μmの波長領域でのより大きな吸収に移るのに役立ち、この増加は、したがってこの領域でのラマンシフトしたパルスの振幅を安定させる。

【0035】あるいは、非線形周波数変換プロセスのノイズは、自己制限周波数倍倍を行うことで最小化され、その場合、倍倍結晶の同調曲線の中心波長は、ラマンシフトしたパルスの中心波長より短い。再び、1.5μm領域での増加したパルスエネルギーは、より大きなラマンシフトに移り、減少した周波数変換効率を引き起こし、したがって、周波数倍倍したパルスの振幅が安定化される。したがって、一定の周波数変換されたパワーは、入力パワーの大きな変化に対して得られる。

【0036】これが図3に示されおり、ここで、1μm波長領域での周波数変換された平均パワーが、1.56μmでの平均入力パワーの関数として示されている。自己制限周波数倍倍は、図3にも示すように、1μmの波長領域での周波数シフトが1.56μmの波長領域での平均入力パワーに依存しないということを確実にもする。

【0037】PSM2にはいくつかの選択できる物がある。図1に示すように、PSMとして一本のファイバ(並張ファイバ)が使用されるとき、システムからバンド幅限界に近いパルスを得るために、適当な分散選延ラインがPCM4に使用される。しかしながら、PCM4の分散選延ラインが、図4に示すようにパルクの回折格子14から構成されると、かなりの問題が生じる。2次と3次の比13/21次分散は、1μmの波長領域で動作する典型的な階段状屈折率分布光ファイバでの2次と3次の比13/21次分散に比べて、回折格子型分散選延ラインで1-30倍大きい。さらに、1μmの波長領域

(10)

特開2002-118315

17

域で動作する低開口数をもつ標準的な段階状屈折率分布ファイバの場合、ファイバでの3次分散の符号は回折格子型分散遅延ラインでの符号と同じである。このように、回折格子型拡張器と合同してファイバ拡張器は、システムでの3次および高次分散の補償ための予備手段にならない。

【0038】10倍以上のパルス拡張を行うためには、3次および高次分散の制御が、PCM4での最適なパルス圧縮に直要になる。この問題を打破するために、PSM2の拡張ファイバ6が、W状多クラッド屈折率分布をもつファイバ、すなわち、'W-ファイバ' (B.J.Ainslie et al) あるいはホーリファイバ (T.M.Monroe et al, 'Holey Optical Fibers' An Efficient Modal Model, J.Lightw.Techn., vol.17, no.6, pp.1093-1102) と書き換えられる。W-ファイバとホーリファイバの両方は、2次、3次、および高次の分散の調整可能な値を許可する。Wおよびホーリファイバで可能な小さいコアサイズにより、標準的な単一モードファイバでの値より大きな3次分散の値が得られる。実装は、図1に示されているのに類似しており、別々には表示されない。そのようなシステムの優位性は、PSMが純粹に遅延型で動作することである。すなわち、PSMは反射型で動作する分散ブランク回折格子の使用を避け、異なるシステム構成のためにシステムの中および外に接続される。

【0039】2次、3次、および4次分散の調整可能な値をもつ別のPSM2が図1に示されている。PSM20aは、通常の段階状屈折率分布光ファイバが、正、ゼロ、あるいは、負いずれかの3次分散を作ることができるという原理に基づいている。ファイバでの最も高い3次分散の値は、ファイバの最初の高次モード、カットオフ近くのLP₁₁モード、を使うことで作られる。図5で、PSM20aの4次と3次分散は、パルス拡張ファイバの3区間15、16、17を使うことで、調整される。最初の拡張ファイバ15は、ゼロの3次と適切な4次分散をもつ一本のファイバである。最初の拡張ファイバ15は、2番目の拡張ファイバ16に接続され、全チャーブパルス増幅システムはもちろん、回折格子圧縮器の3次分散を補償するために選定される。LP₁₁モードの3次分散の優位性を確保するために、最初の拡張ファイバ15は、2番目の拡張ファイバ16と互いのファイバ中心でオフセットをもって接続され、2番目の拡張ファイバ16でのLP₁₁モードの主な励起をもたらす。2番目の拡張ファイバ16での3次分散の値を最大化するためには、高開口数NA > 0.20をもつファイバが望ましい。3番目の拡張ファイバ17の基本モードの後にLP₁₁モードを伝播させるために、2番目の拡張ファイバ16の端部で、類似の接続技術が使われる。ファイバの適切な選定によって、全増幅器、圧縮器の4次分散が最小化される。3番目の拡張ファイバ17は、無視できる分散をもち、短くできる。

18

【0040】光学的なモード変換器の使用なしでLP₁₁モードからLP₀₁モードへのパワー伝搬を行うことで受ける避けられない50%あるいはそれ以上の損失により、全ファイバ拡張器アッセンブリの伝搬損失は、少なくとも25%である。2番目の拡張ファイバのLP₀₁モードの残余のエネルギーは、図1に示すように、選択できる反射型ファイバ格子18で反射される。基本モードと次の高次モードとの間の有効屈折率の大きな差により、二つのモード間で回折格子共鳴波長が10-40nmの間変化し、10-40nmの間のスペクトル幅をもつパルスのために一方のモードを他方に對して選択的に排除することを許容する。

【0041】ファイバ拡張器アッセンブリのエネルギー損失は、3番目の拡張ファイバ17をYb増幅器に同調させることで、小さくされる。この実験は、別々には示さない。

【0042】4次分散が大きくなるとき、最初の拡張ファイバ15は取り除かれる。3次と4次分散が最初と2番目の拡張ファイバの間で異なりさえすれば、4次分散もゼロでない3次分散をもつ最初の拡張ファイバを使用することで、補償される。

【0043】AM13の内部のYt添加ファイバは、Yt添加レベルが2.5モル%で、長さが5mである。単一モードおよび多モード両方のYt添加ファイバが使用され、出力ビームの空間的品質を最適化するために、多モードファイバの場合基本モードが励起されるが、ファイバのコア径は、1-50μm間変えられる。必要とされる利得の値に依存して、異なる長さのYt添加ファイバが使用される。最も高い可能なパルスエネルギーを発生させるために、長さ1mのYtファイバが実装される。

【0044】パルス圧縮は、PCM4で行われる。PCM4は、通常のパルク光学部品(図4に示すパルク回折格子対のような)、単一回折格子圧縮器、あるいは、多数の分散ブリズムやその他の分散遅延ラインを含む。

【0045】あるいは、ファイバやパルクブランク回折格子あるいはチャーブした周期的にポールした結晶が使用される。チャーブした周期的にポールした結晶は、パルス圧縮と周波数倍の機能を結びつけ (A.Galvanaska et al, 'Use of chirped quasi-phase matched materials in chirped pulse amplification systems' U.S. Application No.08/822,967,その内容は、ここに参考文献で具体化されている)、独自のコンパクトなシステムのために伝搬供給するように動作する。

【0046】本発明に対する他の変更や修正は、これまでの開示や教示からの技術に熟練したものに明白である。

【0047】特に、SM1は、周波数領域1.52-2.2nmのバンド幅近くに限定されたフェムト秒パルスを作るための自立ユニットとして使われ、非線形結晶での周波数変換後に周波数領域760nm-1.1μm

(11)

19

のパルスを作るのにも使われる。周波数領域は、フッ化ラマンシフトファイバあるいはシリカより長い赤外吸収線をもつ他の光ファイバを使うことでさらに拡大される。この技術を使って、約3-5 μm以上の波長が達成される。周波数倍倍と共に、760 nmから5000 nmまでの連続同調が達成される。2 μm領域のパルスパワーは、TmあるいはHo添加ファイバを使うことで、さらに高められる。そのような増幅器で、バンド幅限界近くの10 nJを超えるパルスエネルギーをもつラマンソリトンパルスが、2 μmの波長領域の単一モードファイバに供給される。周波数倍倍後、数nJのエネルギーをもつフェムト秒パルスが、分散パルス圧縮器の使用なしで、1 μm領域で得られる。そのようなパルスは、大きなコアの多モードYb増幅器のために高エネルギーシードパルスとして使用され、多モードYt増幅器は、増幅された自然放出を抑えるために単一モードYb増幅器より高いシードパルスエネルギーを必要とする。

【0048】シリカラマンシフト20、Tm添加増幅器21および第2のフッ化ガラスベースラマンシフト22をもつE_rファイバレーザパルス光源19と組み合わせた超広波長可変ファイバ光源の一例が図6のSM1cに示されている。選択できる周波数倍倍器は示されていない；最適な安定性のために、全てのファイバは偏光保持でなければならない。E_rファイバレーザパルス光源に代わる別のものとして、E_r増幅器をもつダイオードレーザパルス光源の組合せが使われる；これは分離して示されない。

【0049】SMの別の代わりとして、SM1dが図7に示されており、ラマンシフトホーリファイバ24と合同して周波数倍倍高パワー受動型モードロックE_rあるいはE_r/Ybファイバ発振器23を有する。ここで、1.55 μmの波長領域で動作する発振器23からのパルスは、周波数倍倍器25とレンズ系26を使って最初に周波数倍倍され、その後周波数倍倍されたパルスは、750 nm以上の波長あるいは少なくとも810 nm以上の波長に対してソリトン維持分散を与えるホーリファイバ24でラマンシフトされる。1 μm波長帯あるいは1.3、1.5、2 μm波長帯でラマンシフトしたパルスを増幅し、且つ異なるデザインのラマンシフトファイバを選定することで、波長領域が約750 nmから5000 nmの間に動作する連続的に可変な光源が作られる。多数の付属増幅器27をもつそのような光源のデザインも図7に示されている。

【0050】最適なラマン自己-周波数シフトのためには、ホーリファイバ分散が、波長の間数として最適化されなければならない。ホーリファイバの3次分散の絶対値は、シリカの3次材料分散の絶対値以下か、あるいは等しくなければならない。これは、2次分散の値が負でなければならず、2次分散ゼロがシード入力波長で300 nm以内でなければならぬからである。

特開2002-118315

20

【0051】Yb増幅器用シード光源の別の代替物として、反ストークスファイバでの反ストークス発生が使用される。反ストークス発生後、広い波長可変光源を作るために、付加的長さのファイバ増幅器とラマンシフトが使用される。一般的な構成は、図7に示されているものに類似している。ここで、周波数倍倍手段25は省略され、ラマンシフト手段24は反ストークス発生手段と置き換えられる。たとえば、1.55 μmで動作するE_rファイバレーザシード光源を使った反ストークス発生手段で1.05 μm波長帯の光を効率よく発生するためには、小さいコアと低い値の3次分散をもつ光ファイバの形をした反ストークス発生手段が最適である。3次分散の低い値は、ここでは、1.55 μm波長領域での標準的な偏光遮断ファイバの3次分散の値に比べて小さい3次分散の値と対応する。さらに、反ストークスファイバの2次分散の値は、負でなければならないYt増幅器の別の代替シード光源として、受動モードロックYbあるいはNdファイバレーザがSM内部に使用される。好ましくは、負分散で動作するYbソリトン発振器が使用される。Ytソリトン発振器を作るために、図8に示すように、出力ファイバ38に接続されたチャーブファイバ格子29によって負分散が共振器内に導入される；あるいは、ホーリファイバ(T. Monroe, et al)のような負分散ファイバがYtソリトンレーザ共振器に使用される。そのような配列を具体化するSMが、図8中に1eとして示されている。ここで、Ytファイバ30は、偏光保持で、偏光子31がファイバ(結合がレンズ32で達成されている)の一つの軸に沿う発振を追るために組み入れられる。簡単のために、Ytファイバ30は、図8に示すように、側方からクラッドポンプされる。しかしながら、通常の単一モードファイバを組み入れる受動モードロックYtファイバレーザも使われる。そのような配列は別々に示されていない。回折格子35は、分散制御のために使用され、また、内部共振器ミラーとして使用される。ポンプダイオード33は、V溝34を通してポンプ光を供給する。

【0052】ホーリファイバを組み入れる配列は図8に示したシステムとほとんど同じであり、ここで付加的なホーリファイバは共振器のどこかに接続される。ホーリファイバを組む入る場合、ファイバブラック回折格子は負分散をもつために不要であり、同様にブラック回折格子は誇色体ミラーで置き換えられる。

【0053】実施するのに最も簡単なものは、しかしながら、正分散で動作するYb発振器であり、それは、共振器分散を制御するために負分散ファイバブラック回折格子あるいは、ホーリファイバのような特別の共振器要素を必要としない。‘放物線状’Yb増幅器(あるいは通常のYt増幅器)と共に、高パワーYt増幅器システムのための非常にコンパクトなシード光源が得られる。

Yb増幅器40をもつそのようなYb発振器が図9に示

(12)

21

されており、ここで、好ましくは、 Y_b 増幅器40は後に鏡面するような「放物線状」 Y_b 増幅器である。図8中と同じ要素には同じ番号が付与されている。

【0054】図9の中のSM1†は、図8に開示して記述されたような側方ポンプ Y_b 増幅器40を有するが、他のポンピング配列も実装されている。 Y_b ファイバ44は、当然偏光保持で、偏光子31が単一の偏光状態を選ぶために挿入される。ファイバブラック回折格子37は、 Y_b の利得バンド幅に比べ小さな反射バンド幅をもち、 Y_b の利得バンド幅に比べ小さなバンド幅をもつパルスの発振を確実にする。ブラック回折格子37はチャーブされるか、あるいはチャーブされない。チャーブされないブラック回折格子の場合、 Y_b 発振器内で発振するパルスは、正にチャーブされる。 Y_b 発振器内でのパルス発生あるいは受動モードロックは、過飽和吸収体28で始められる。光ファイバ39は付加的で、 Y_b 増幅器40に送り出されたパルスのバンド幅をさらに制限する。

【0055】SM1†内の Y_b 増幅器40内の放物線状パルスの形成を最適化するために、入力パルスは Y_b の利得バンド幅に比べ小さなバンド幅をもつべきである；また Y_b 増幅器40への入力パルス幅は、出力パルス幅に比べ小さくなればならないし、 Y_b 増幅器40の利得はできるだけ高く、すなわち、10以上でなければならぬ。また、 Y_b 増幅器40内の利得飽和は小さくなければならない。

【0056】放物線状増幅器の一例として、長さ5mの Y_b 増幅器が使用される。放物線状パルスの形成は、約0.2-1psのパルス幅と3-8nmのスペクトルバンド幅をもつシード光源を使用することで確実にされる。放物線状パルスの形成は、 Y_b 増幅器40内でシード光源のバンド幅を約20-30nmまで広げるが、出力パルスは、約2-3psに広げられる。放物線状パルス内でのチャーブが高度に線形であるので、圧縮後に100fsオーダーのパルス幅が得られる。標準的な超高速固体増幅器が自己位相変調からの非線形位相シフトを p_1 （最近の技術で良く知られた）と同じ大きさだけ許すので、放物線状パルスファイバ増幅器は、 $10 * p_1$ およびそれ以上の大きさの非線形位相シフトを許すことができる。簡単のために、我々は Y_b 増幅器を放物線状増幅器と呼ぶ。放物線状増幅器は単純な倍率則に従い、増幅器長を適当に増やすことで、1nmあるいはそれ以下のスペクトルバンド幅をもつ放物線状パルスが、約100mの長さの放物線状増幅器を使用することで発生される。

【0057】放物線状パルスが自己変調の大きな値と、パルスの中斷を招くことなしのスペクトル拡張の大きな値とを許すことができるので、放物線状増幅器のピークパワーは、標準的な増幅器に比べ大きく高められる。

特開2002-118315

22

これは次のように説明される。長さしの光ファイバでの自己位相変調で受けた時間依存位相遅れ $\phi_1(t)$ はピークパワーに比例する、すなわち、

$$\phi_1(t) = \gamma P(t) L,$$

ここで、 $P(t)$ は光パルス内での時間依存ピークパワーである。周波数変調は位相変調の導関数で与えられ、すなわち、 $\phi_2 = \gamma L [\partial P(t) / \partial t]$ 。放物線状パルスプロファイル $P(t) = P_0 [1 - (t / t_0)^2]$ 、ここで、 $(-t_0 < t < t_0)$ の場合、周波数変調は線形である。それで、実際にパルスプロファイルも放物線状のままであり、線形周波数変調だけをもつ大きなピークパワーの発生と線形パルスチャーブの発生とを可能にすることが、示されている。

【0058】 Y_b 増幅器40で発生されたチャーブパルスは、図4に示すような回折格子圧縮器を使って圧縮される。あるいは、チャーブした周波的にポールした結晶42とレンズ41が、図9に示されるように、パルス圧縮のために使われる。図9に示すSM1†と開通して、約530nmのグリーンスペクトル領域でのフェムト秒

20 パルスを出す非常にコンパクトな自立光源が得られる。

【0059】図9に示す受動モードロック Y_b ファイバレーザ44のほかに、 Y_b 増幅器にシードするために別の光源も使われる。これら別の光源は、ラマンシフトEまたはE' / Y_b ファイバレーザ、周波数シフトTまたはH₀ファイバレーザおよび、ダイオードレーザパルス光源を有する。これら別の実装物は別々に示されない。

【0060】図10でファイバ供給モジュール(FDM)45が図1に示す基本システムに加えられる。この場合PSM2は除かれる；しかしながら、増幅モジュールのピークパワーを高めるためにPSM2は必要だと看込まれる。図10に示す Y_b 増幅器7は非放物線状、放物線状の両方で動作できる。

【0061】最も簡単な構成では、FDM45が一本の光ファイバ46（供給ファイバ）からなる。放物線状増幅器の場合、供給ファイバ46はパルス品質での損失を招くことなく Y_b 増幅器7に直接接続される。むしろ、放物線状パルスプロファイルにより、沢山の自己位相変調の場合でも、PCM4でのさらなるパルス圧縮を可能にするパルスに近似的に線形なチャーブが付加される。

PCM4は、図4に示す小寸法パルク回折格子圧縮器14を使って供給ファイバと共にFDM45に集積化される。この場合、適当なコリメートレンズと接続する供給ファイバは、図4に示す入力と置き換えられる。そのような実施の別々の図は示されてない。しかしながら、PCM4の使用は付随的で、たとえば、チャーブ出力パルスがシステムから要求されるなら、省かれる。PCM4と共に、図10に記載されたシステムは、派生的なチャーブパルス増幅システムを構成し、ここで、パルスが時間に関して分散的に広げられる間、利得はもちろん自己

(13)

23

位相変調も加えられる。通常のチャーブパルス増幅システムに自己位相変調を付加することは、一般的にパルス圧縮後に大きなパルス変形をもたらす。放物線状パルスの使用はこの制限を打破する。

【0062】次世代ファイバ光通信システムは、チャーブパルス増幅システムと解釈される（たとえば、D.J. Jones et al., IEICE Trans. Electron., E81-C, 180 (1998) 参照）。明らかに、放物線状パルスによるパルス変形の最小化は、光通信システムに寄り関連する。

【0063】50 fs より短いパルス幅を得るために、FDM モジュールあるいは光PSM内の3次および高次の分散の制御が重要になる。PSMでの高次の分散の制御は、図1と5に関連して既に説明された； FDM の高次の分散の制御は、非常に類似しており、図11に示す FDM 4.5a の構造的な実施例を説明される。図1に丁度示すように、大きな3次分散のW-ファイバがパルク PCM4 の3次分散を補償するために使用される。図5に丁度示すように、FDM の高次の分散に対して異なる値をもつファイバ15、16、17を使うことで、パルク回折格子を有するPCM4を含む全システムの高次の分散が補償される。

【0064】PSMの別の実施例が図12及び図13に示されており、それらはPSMに市場で入手できる線形チャーブファイバプラック回折格子を使用できるようにするような実際的な同じ値をもち、PCMもPSMも有する全チャーブパルス増幅システムの高次の分散を補償する。別の代替物として、非線形チャーブファイバプラック回折格子もPCMの分散を補償するためにPSMに使用される。そのような配列は分散して示されていない。

【0065】W-ファイバの使用あるいはPSMでのLP₁₁モードを避けるために、図12に示すようなPSMの別の実施例がPSM2bとして示されている。ここで貴の線形チャーブプラック回折格子4.7が、貴の3次分散をもつ単一モード拡張ファイバ4.8とサーチュレータ4.9と接続して使用される。貴の線形チャーブプラック回折格子の導入は、PSM2bでの比（3次/2次）分散を増大させ、パルク回折格子圧縮器が使用されるとき、PCM4での3次分散の高い値の補償を可能にする。PSM2bは、PSMの複雑さをさらに改善するために線形チャーブファイバプラック回折格子と接続したW-ファイバを含むこともできる。

【0066】高次の分散補償用PSMの別の実施例として、図13に配列がPSM2cとして示されており、それは、正の線形チャーブファイバプラック回折格子4.9、サーチュレータ5.0、および別のファイバ透過型回折格子5.1を有する。ここで、PCMモジュール内の線形および高次の分散を補償するために、正の線形チャーブファイバプラック回折格子4.9は、正の2次分散を作り、他のファイバ透過型回折格子5.1は、適当な値の付加的な2次、3次、4次分散を作る。一つ以上のファイ

特開2002-118315

24

バ透過型回折格子あるいはファイバプラック回折格子が、3次、4次およびできればより高次の分散の適当な値を得るために使用される。

【0067】Yb増幅器からの増幅されたパルスエネルギーを山Jのオーダおよびそれ以上まで増大させるために、パルス探査器とさらなる増幅段が図14に示すように実装される。この場合、パルス探査器5.2は最初の増幅段AM1-3aと2番目の増幅段AM2-3bの間と、PSM2と最初の増幅モジュールAM1-3aの間に挿入される。任意の数の増幅器とパルス探査器が、最も高い可能な出力パワーを得るために使われる。ここで、最後の増幅段は好みしくは、多モードファイバからなる。回折限界出力を得るために、多モード増幅器の基本モードが選択的に励起され、よく知られた技術（H.E. Fermann et al., United States Patent, No. 5,818,630）を使ってガイドされる。パルス探査器5.2は、一般的に音響-光学あるいは電気-光学変調器のような光変調器からなるように選択される。パルス探査器5.2は、SMから出てくるパルスの繰り返し周期を与えられた値（たとえば、50 MHzから5 KHz）だけ低下させ、平均パワーは小さいままで非常に高いパルスエネルギーの発生を可能にする。あるいは、直接スイッチできる半導体レーザも、システムの繰り返し周期を任意の値に固定するためには使用される。さらに、後方の増幅器段に挿入されたパルス探査器5.2も増幅器での増幅された自然放出の増強を抑え、高エネルギー超短パルスに出力パワーを集中させることを可能にする。増幅段は、以前説明したようなPSMやPCMと合致しており、ここでは、全システムの分散がシステムの出力で最も短い可能なパルスを得るために最小化される。

【0068】増幅モジュールAM1-3aは、放物線状スペクトルをもつパルスを生成する放物線状増幅器のようにデザインされる。同様に、AM1-3aからの放物線状パルスは、図14にも示されるようなパルス成形あるいはパルス拡張ファイバ5.3で放物線状パルススペクトルをもつパルスに変換され、ここで、自己位相変調と正分散の相互作用がこの変換をうまく行う。これは理解されるであろう、なぜなら、放物線状パルスプロファイルをもつチャーブパルスが一本のファイバ内で放物線状スペクトルをもつ放物線状パルスに進化することができるからである。放物線状パルス形状は、次の増幅段でかなりの自己位相変調の量を最大化し、順番に、PSM2とPCM4で必要とされる分散パルス拡張と圧縮の量を最小化する。同様に、放物線状パルス形状は、大きなパルス変形なしに、PSM2での十分な量の自己位相変調を許容することを認める。

【0069】一度パルスが拡張されると、次の増幅段での自己位相変調の有効な影響は、平らなパルス形状を使うことで最小化される。平らなパルス形状は、平らなパルススペクトルを生成するために、図14に示すような

(14)

25

光振幅フィルタ54を最後の増幅モジュールの前に挿入することで生成される、平らなスペクトルは、十分なパルス拡張の後、本当に平らなパルスに変換される、なぜなら、十分なパルス拡張の後のスペクトル含有量と時間遅れの間には直接の関連があるからである。自己位相変調の値が 10π と同じ大きさでも、大きなパルス変形を招くことなく平らなパルス形状に対して許容される。

【0070】図14に示すような振幅フィルタも、増幅器でのパルススペクトルの再形成が無視できるとき、すなわち、放物線状パルスが発生される体制の外側に、自己位相変調で強くチャーブしたパルスに対する増幅器チューンでの高次分散を制御するために使用される。この場合、自己位相変調は、かなりの量の次式で表される高次分散を生成する：

$$\beta_{\text{eff}} = \frac{P_0 L_{\text{eff}}}{[d^2 S(\omega) / d\omega^2]} \omega^2$$

ここで、 P_0 はパルスのピークパワーであり、 $S(\omega)$ は端端化されたパルススペクトルである。 L_{eff} は有効線形長で、 $L_{\text{eff}} = [\exp(gL) - 1] / g$ 、ここで、 L は増幅器長で、 g は単位長さ当たりの増幅器利得である。したがって、図14に示すような振幅フィルタで強くチャーブしたパルスのスペクトルを正確に制御することで、任意の量の高次分散がチャーブパルス増幅システムでの高次分散の値を補償するために導入される。それは、約1nsに拡張した500fsパルスに対して本当に示された、 $\sim 10\pi$ の位相シフトは、1800本/mmの溝をもつバルク圧縮器（図4に示すような）の3次分散を補償するために十分である。魅力的な利得性のよい振幅フィルタは、たとえば、ファイバ透過型回折格子であるが、任意の振幅フィルタが、パルススペクトルを制御するために、高次分散を引き起こす増幅器の前に使用される。

【0071】パルス探集器をもつ増幅器モジュールの組合せに対する別の実施例として、図15に示す構成が使用される。非常に高いエネルギーのパルスは、それらの増幅のために大きなコアの多モードファイバを必要とするので、シングルーパスの偏光保持ファイバ増幅器で基本モードを制御することは困難である。この場合モード結合を最小化するためと商品質の出力ビームを得るために、高度に中心対称の非偏光保持ファイバ増幅器を使うことが好ましい。そのような増幅器から決定論的な場所に対して安定な偏光を得るために、図15に示すようなダブルーパス構成が要求される。ここで、単一モードファイバ55が増幅器56の最初のバスの後に空間モードフィルタとして使用される；あるいは、ここに開口が使用される。空間モードフィルタ55は、多モード増幅器56の最初のバスの後のモードを絞りだし、多モード増幅器の達成可能な利得を制限しながら高次モードの増幅された自然放出を抑える。レンズ61は、増幅器56の中と外に空間モードフィルタ55、およびパルス探集器

特開2002-118315

26

52a、52bを結合するために使用される。ファラデイ回転子57は、後方伝搬光が前方伝搬光と直交するように偏光されることを確実にし、後方伝搬光は、図示した偏光ビームスプリッタ58でシステムの外に出される。システムの効率を最適化するために、システムの入力部で多モードファイバ6の基本モードに回折限界近い光路が結合され、ここで、利得ガイドが多モードファイバで増幅されたビームの空間的品質をさらに改善するために使用される。SMから供給されるパルス列繰り返し周期を小さくするためと多モード増幅器での増幅された自然放出を抑えるために、第1光変調器52aが多モード増幅器の最初のバスの後に挿入される。理想的な場所は図示するように反射ミラー59の前である。結果として、60-70dBの大きさのダブルーパス利得がそのような構成で得られ、pJエネルギーをもつシードパルスをmJエネルギーレベルまで増幅することから要求される増幅段の数を最小化する。この複数の増幅器は、以前議論したようなSM₃、PSM₃およびPCM₃と完全に合致し、mJのエネルギーをもつフェムト秒パルスの発生を可能にする。高利得増幅器モジュール構築の別の代替物として、SMで供給されるパルス列の繰り返し周期を低下させることができが、図16に示すような増幅器モジュールに注入する前に、附加的な第2変調器52bで行われる。第1変調器52aの通過窓の繰り返し周期は、第2変調器52bの通過窓の繰り返し周期と同じかそれよりも低くなければならない。そのような構成は、別々には示されていない。図15は、ここに参考文献として添付された米国特許5,400,350の図5といくつかの類似性を共有する。

【0072】本発明の別の実施例として、長い分布屈折率型正分散増幅器61での放物線状パルスの形成を使う光通信システムが図16に示されている。分散補償素子63が、ファイバ光増幅器の間に挿入される。光学フィルタ62が増幅器でのパルス形成プロセスを最適化するために、さらに実験される。光フィルタは、繰り返し透過スペクトル特性をもつように、限定された自由スペクトル範囲をもつ光学エタロンに基づいており、波長分割多重で要求されるような多波長チャンネルの同時透過を可能にする。

【0073】キーとなる利得なことは、ファイバ透過システムの光カーブ非線形性で導入されるチャーブを線形化するために、長い正分散ファイバの大きな利得を組合せることである。したがって、一般に、光通信システムの透過特性は、正分散（非ソリトン支持）増幅器を実験することで、改善される。そのような増幅器は、少なくとも 10Km の長さをもち、 10dB/Km 以下の利得をもつ。光学非線形性の重要な効果を最小化するための放物線状パルス形成の始まりを利用するために、増幅器当たりの総合利得は 10dB を超えることができる。さらなる改善は、 3dB/Km 以下の利得をもち、総合利得

(15)

27

が20 dB以上であるように全長を長くした増幅器を使うことで増進される。ファイバ透過ラインの透過特性的さらなる改善は、ファイバ透過ラインの角分散素子のカーブ非線形性の歪を最小化することで得られる。これは角分散素子のためにチャーブファイバ回折格子を使用することで達成される。

【0074】透過ラインでの放物線状パルスの形成に加えて、外部光源で放物線状パルスを発生させること、そしてそれらを非シリトン支持増幅器ファイバに注入することも有利である。そのようなシステムを有効に使用するため、ホーリファイバで可能な低損失正分散透過が有益である。ファイバ透過ラインに沿ってとファイバ透過ライン端とに分散補償素子が実装される。そのようなシステムの実施は、図16に示すものに類似しており、別々には示されていない。上述のような類似のラインに沿ってデザインされた光通信システムは、ここに参考文献として添付された暫定出願No. 000000に開示されている。

【0075】電気通信領域における本発明の別の実施例として、波長可変ラマン増幅器がラマンシフトパルスを使って構成される。与えられたポンプ波長の高パワー光信号がポンプ波長に開してレッドシフトした信号波長のラマン利得を作るということは、最近の技術でよく知られている。事実、それは、ここで説明された波長可変パルス光源の構造に使用されるポンプパルス自身に作用する効果である。

【0076】波長可変ラマン増幅器の一般的なデザインが図17に示されている。ここで、短い光パルスはシード光源で作られる。シードパルスは変調器65で光学的に変調され、光増幅器66で増幅される。シードパルスは次に一本のラマンシフトファイバ67に注入される。ラマンシフトファイバは一本のホーリファイバあるいはその他のデザインのファイバである。ラマンシフトパルス間の時間周期は、図17に示すようなパルス分割手段（ポンプパルス分割器）68を使って減少される。このパルス分割手段は、たとえば、不均勻なマッハ-ヴェンダ干涉計のアレイであるが、単一パルスからパルス列を発生させる任意の手段が受け入れられる。適当に波長シフトした増幅され変調されたシードパルスは、ラマン増幅器69に注入されるポンプパルスを含み、信号入力70で動作し、信号出力71を作るために、図17に示すように、ラマン増幅器で信号波長の光利得を発生する。

【0077】ラマン増幅器ファイバ内で、信号波長での光信号は、ラマン増幅器のポンプパルスと反対方向に伝搬する。いくつかの信号波長も信号結合器を使ってラマン増幅器に注入され、そのような増幅器を光波長分割多路に合致するようにする。たとえば、波長1470 nmのポンプパルスは、シリカファイバ内で1560 nmの波長領域近辺でのラマン利得を生成する。ラマン増幅器の利得を最適化するために、ホーリファイバあるいは相

特開2002-118315

28

対的に小さいファイバコアをもつその他のファイバが使用される。

【0078】ラマン利得が得られる波長の中心波長は、ポンプパルスの波長を同調することで同調される。ポンプパルスの波長同調は、ラマンシフトファイバ67に注入される前にシードパルスの幅とパワーとを変調することで達成される。

【0079】さらに、ラマン増幅器の利得スペクトルはポンプパルスの波長を高速に同調することで調整され、10 倍号パルスは、有効に変更されたラマン利得スペクトルに合わせられる。有効なラマン利得が時間に依存しないことを確かめるために、ポンプパルスを同調するスピード、すなわち、必要な波長範囲にわたってパルスを同調するのにかかる時間周期は、信号パルスがラマン増幅器ファイバ69を移動するのに要する時間に比べて小さくされなければならない。

【0080】このように、電気通信システムのラマン増幅器にとって、単一パルスからできる利得より広いスペクトル利得を得ることが有利である。異なる波長で伝搬される変化するデータ量を補償するために、WDM電気通信システムの利得を動的に変えることができることも有利である。スペクトル利得を広げる一つの方法は、通信ファイバを伝搬する時間に比べてポンプ波長を早く同調することである。利得は、ポンプが異なる波長でとどまる時間を変えることで目的的に調整される。利得スペクトルを調整する別の方針は、異なる波長ごとに大多数のポンプパルスをラマンシフトファイバに使用することである。各波長ごとに相対的な数のパルスを変調することは、相対的な利得プロファイルを変更することを可能にする。

【0081】より具体的に言うと、図1に示されたフェムト秒パルス光源は、高パワーのためにYb増幅器で増幅される。これらのパルスは、フェムト秒パルス光源の動作点より短い波長で零分散点をもつファイバで、1400-1500 nm領域にラマン自己周波数シフトされる。このファイバはホーリファイバでもよい。1400-1500 nm領域にラマン自己周波数シフトをもつワットレベルのパワーを達成するためには、光源の最適繰り返し周期が1 GHz以上であるべきである。40 利得スペクトル拡張と自動利得制御は、異なる量のラマンシフトを得るために、大多数のポンプ波長を使用することで、ポンプ波長を同調することで、あるいは、パルス列の個々のパルスのパルス振幅を変調することで、得られる。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明に関する高ピーク、高平均パワー、超短レーザーパルス発生用のモジュール化したコンパクトな波長可変システムの図である。

【図2】本発明に使用するためのシードモジュール（SM）の第一実施例の図である。

(16)

特開2002-118315

29

30

【図3】本発明の第一実施例に関する与えられた入力パワーで出力される平均周波数倍増幅パワーと波長の関係を示すグラフである。

【図4】本発明で使用するためのパルス圧縮器モジュール(PCM)の第一実施例の図である。

【図5】本発明で使用するためのパルス拡張器モジュール(PSM)の第一実施例の図である。

【図6】本発明で使用するためのシードモジュール(SM)の第二実施例の図である。

【図7】本発明で使用するためのシードモジュール(SM)の第三実施例の図である。

【図8】本発明で使用するためのシードモジュール(SM)の第四実施例の図である。

【図9】本発明で使用するためのシードモジュール(SM)の第五実施例の図である。

【図10】ファイバ分配モジュール(FDM)が、図1に示された本発明の実施例に付加された本発明の一実施例

* 例の図である。

【図11】本発明で使用するためのファイバ分配モジュール(FDM)の一実施例の図である。

【図12】本発明で使用するためのパルス拡張器モジュール(PSM)の第二実施例の図である。

【図13】本発明で使用するためのパルス拡張器の第三実施例の図である。

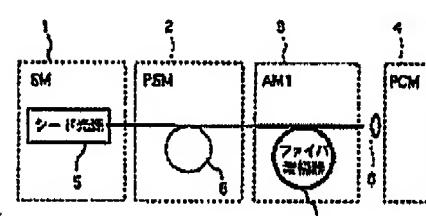
【図14】パルス採集素子と付加的増幅段が付加された本発明の一実施例の図である。

【図15】パルス採集素子のような光変調器と組み合わせてファイバ増幅器が少なくとも一つの前方バスと一つの後方バスで動作する本発明の別の実施例の図である。

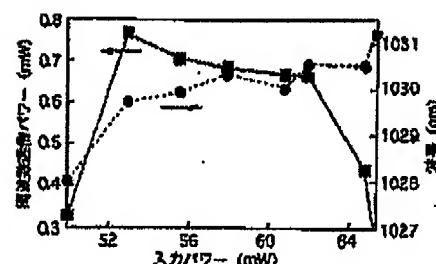
【図16】光通信の面における本発明の別の実施例の図である。

【図17】低気圧用波長可変ラマン増幅器の面における本システムの別の実施例の図である。

【図1】

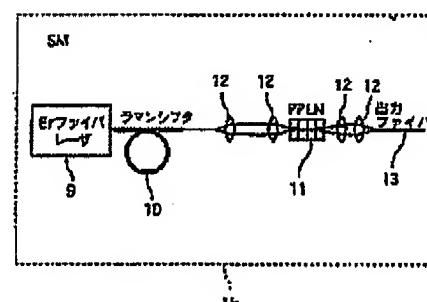


【図3】

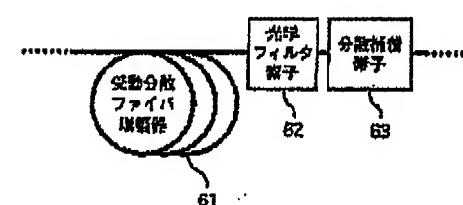
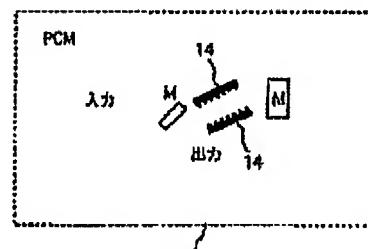


【図16】

【図2】



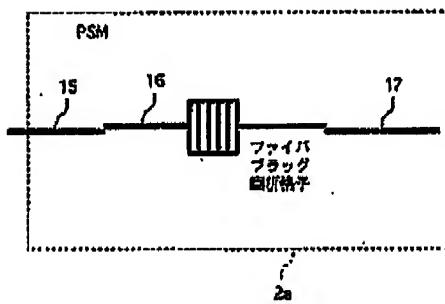
【図4】



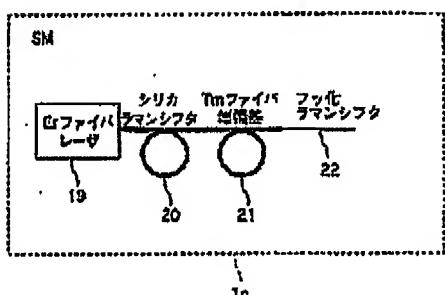
(17)

特開2002-118315

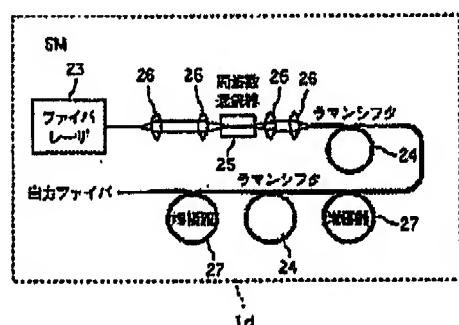
[图5]



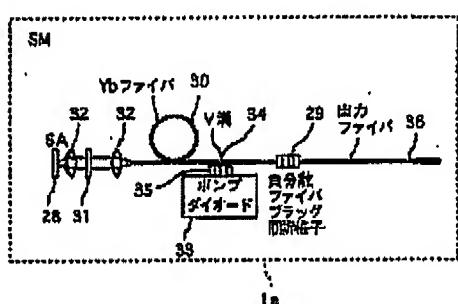
[图6]



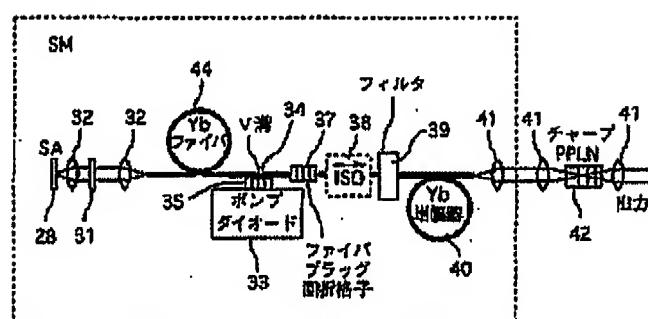
[图7]



[圖 8]



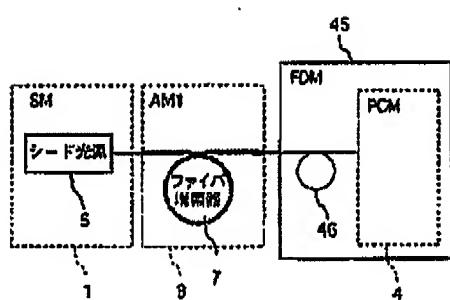
〔圖9〕



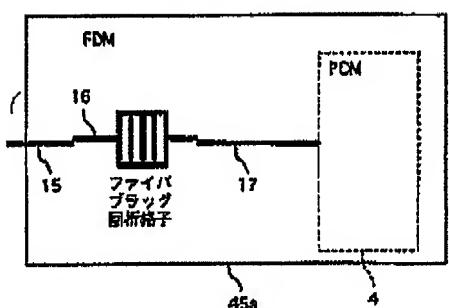
(18)

特開2002-118315

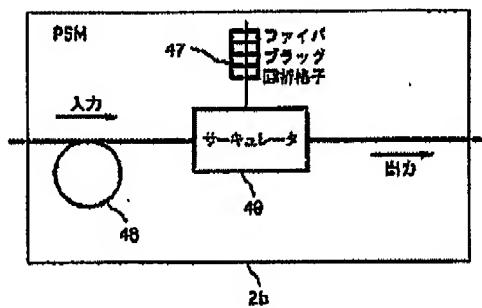
【図10】



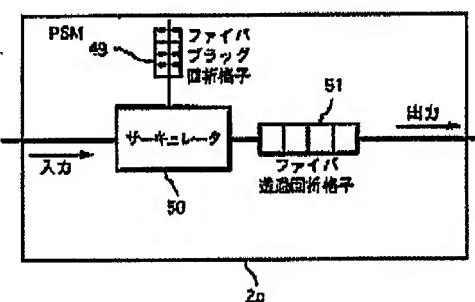
【図11】



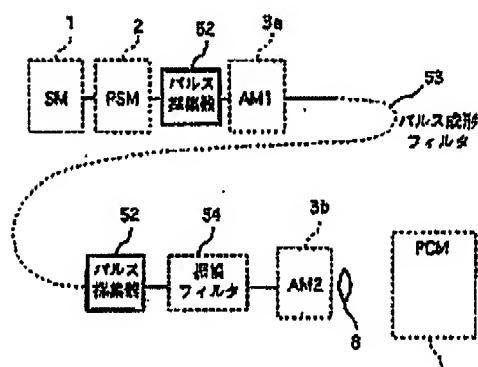
【図12】



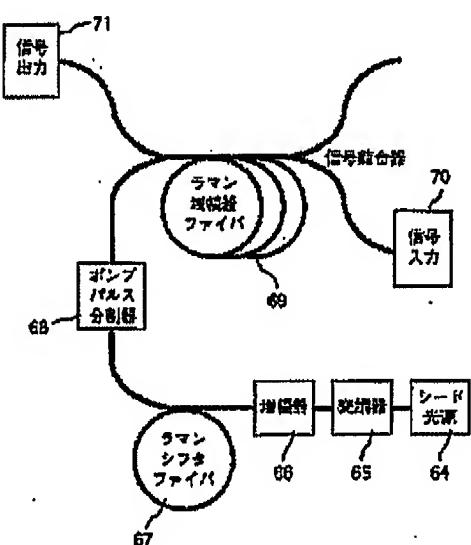
【図13】



【図14】



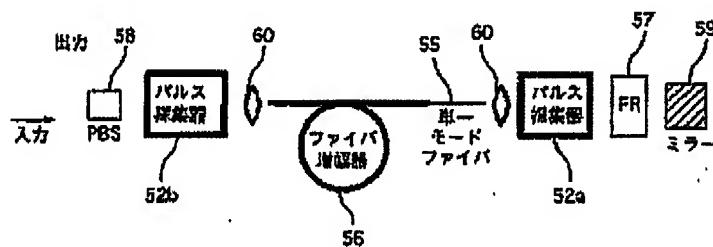
【図17】



(19)

特開2002-118315

[図15]



フロントページの続ぎ

(51)Int.Cl.	識別記号	F I	トータル(参考)
H 01 S	3/109	H 01 S	3/109
3/30		3/30	Z

(72)発明者	ドナルド・シェー・ハーター アメリカ合衆国 ミシガン州 アンアーバ - サルグレイブ ブレイス 3535番地	下ターム(参考)	2H050 AC31 AC83 AD00 2K002 AA02 AB12 AB30 AB33 BA03 CA02 CA03 CA15 DA19 EA07 EA30 HA20 HA24 5F072 AB07 AB08 AB09 AB13 AK06 JJ01 JJ07 KK07 KK12 KK30 QQ02 QQ07 RR01 SS08 YY15
---------	--	----------	--